

学位請求論文の内容の要旨

論文提出者氏名	脳神経科学領域精神・神経分子科学教育研究分野 氏名 久保 一利
<p>(論文題目)</p> <p>Relationship between quality of life and restless legs syndrome among a community-dwelling population in Japan.</p> <p>(日本の地域住民におけるレストレスレッグス症候群と QOL の関係)</p>	
<p>(内容の要旨)</p> <p>(背景)</p> <p>Restless legs syndrome は下肢を動かさずにはいられない衝動と異常感覚を生じる感覚運動障害である。夜間の就床時に下肢の症状が出現しやすいため、睡眠障害を呈することが多い。潜在的に存在する RLS の実態を明らかにするため、日本の一般住民における RLS の症状と、健康関連 QOL との関係を調査した。</p> <p>(方法)</p> <p>この縦断的研究は、2013 年に岩木健康増進プロジェクトに参加した健康成人 985 名を対象としたものである。RLS 症状の評価には、International Restless Legs Syndrome Study Group による診断基準を用いた。</p> <p>また、社会人口学的データを得るための問診、the second version of the Short Form Health Survey(SF-36®v2)、the Center for Epidemiological Studies Depression scale、the Pittsburgh Sleep Quality Index を施行した。RLS 症状と SF-36®v2 の各下位項目の得点の関係を評価するため、重回帰分析を行った。</p> <p>(結果)</p> <p>本研究での全体の RLS の有病率は 1%であった。RLS 診断基準の合致項目数と SF-36®v2 の各下位項目の得点については、身体機能、日常役割機能(身体)、体の痛み、社会生活機能、精神的側面のサマリースコアの項目で有意な負の関連性を認めた。</p> <p>(結論)</p> <p>年齢、性別、併存疾患などの交絡因子を調整したところ、RLS の負担は主に身体的な問題であるようであった。RLS を持つ一般住民の健康関連 QOL が損なわれることから、これらの症状のスクリーニングと治療の必要性の評価を行うことが重要である。</p>	